

大阪柔整だより

「第15回大阪学術大会」開催

「ダイバーシティ&インクルージョン」をテーマに、第15回大阪学術大会が9月30日（土）、10月1日（日）の2日間に渡って、大阪柔整会館で開催されました。

このテーマは、多様な人材を活かし、その能力が発揮できるようにする取り組みを指す言葉で、ダイバーシティは直訳すると「多様性」、インクルージョンは「受容性」。単に組織において人材の多様性を高めることだけを目的とするのではなく、その多様な人材が能力を発揮できる組織風土づくりを行うことまで含めた概念です。

1日目の開催セレモニーでは、公益社団法人 大阪府柔道整復師会 川口 靖夫 副会長の開会の辞から始まり、大会会長 公益社団法人 日本柔道整復師会 長尾 淳彦 会長の挨拶で「6月に発足した新体制につき、各部の縦だけでなく横のつながりを構築、風通しを良くし、縦と横の糸をきちんと組み、しっかりとした情報と業務の共有化をねらい、柔道整復師は何をしているのか？何ができるのか？を行政や保険者、そして国民に訴えかけていく。また、会員からの希望や意見を直接汲み、開かれた柔道整復師会を目指すこと、新体制となった徳山学術教育部長と連携し、柔道整復師や柔道整復術が国民のためにどう貢献できるかを考え、若い世代の先生方が家を建て、不自由なく子供が育てられるように恩返しのため努力する。」と述べられました。

次に実行委員長の公益社団法人 大阪府柔道整復師会 徳山 健司 会長より、冒頭のテーマの概要について解説され、その考えを元に今学術大会が構成されたと話されました。また「柔道整復師の業界内の発信だけでなく、周りの様々な業種と連携協力して柔道整復の技術向上と業界の発展を構築していく。そして、日整学術教育部として得られたエビデンスを保険部と共有し、根拠として料金交渉に活かしていきたい。」と述べられました。

プログラムでは「日整学術教育部からのお願い」として、徳山 健司 日整学術教育部長から「匠の技伝承プロジェクトの意義等について」と題し、標準治療の根幹がない柔道整復術の現状に触れ、施術の再現性を高めるために技のエビデンス、EBM（Evidence-Based Medicine）を元にした標準治療の確立のための一つとして超音波観察装置の必要性について述べられました。

次に「エコーを柔整師の手に」と題し、日整学術教育部 小野 博道 講師より超音波観察装置の扱いの基礎や実例の紹介を提示して解説され、ワークショップでは、橈骨遠位端部の観察のポイントについて実演されました。最後は、日整学術教育部 篠 弘樹 講師よりワークショップ、橈骨遠位端部骨折を例に一人でできる整復法とクラーメル副子を使用した固定法について実演され、一日目が終了となりました。

次頁へ続く